

提

言

〈27〉



合田 哲雄

内閣府（科学技術・イノベーション推進事務局）審議官

私たちはそれぞれ認知の特性がある。話すこと・聞くこと、書くこと、読むことのそれぞれでも情報の受け取りと表現にわたって強み・弱みがあるし、文字情報や音、映像など扱う情報の得意不得意もあるだろう。しかし、工業化社会では計画的な勤労性や文書主義が必須なため、学校教育においては、試験時間内に問題を読み、理解し、正解を書くという情報処理力が重視され、私たちはそれに自分を合わせることで求められてきた。

ただ、合わせられる人ばかりではない。私自身、空間把握が弱く数学では苦勞したし、関心のあることに深くのめり込む傾向は各教科満遍なく得点する上で大きな障害だった。私は、中・高校時代に信じられないほど高成績だった霞が関の同僚諸氏とは異なり、教師の期待に応える優等生では決まらなかった。

そんな私にとって、9月末の「未発見の才能サミット」（YouTubeで当日の動画が公開）への参加は、貴重な機会だった。

このサミットを主催したのは、コンピュータソフットの欠陥やバグを修正するデバッグというサービスを提供するデジタルハーツ社の特例子会社であるデジタルハーツプラ

「主語を子どもにした学び」の実現 — 優等生でなかった私の思い

認知の特性「そろえる」教育から「伸ばす」へ

ス社。その代表は、経産省から転職した畑田康二

郎さんだ。

5月25日の朝日新聞の夕刊1面は、就労困難者を雇用するソーシャルファームとしての畑田さんの取り組みを紹介している。引きこもりや不登校を経験し、困難さに直面している方々が多い同社の社員の中で、例えば、ADHDの傾向のある社員はあらゆるものに興味を示すところがあり、さまざまな角度から操作して、不具合が起きないかをテストする仕事に向いているし、ASDの社員は黙々と仕事をする傾向があり、マニュアルに沿って一つずつ操作して不具合を探ることが得意。

畑田さんは「就労困難者を雇うのは、企業の社会的責任からではなく、それが真の成長につながるから。社員が仕事に合わせるのではなく、仕事の内容を社員に合わせることで持続可能な取り組みになる」と述べている。

このコメントは、学校教育の在り方も問うている。1月の中央教育審議会答申が指摘した「主語を子どもにした学び」とは「子どもを学びに合わせるのではなく、学びを子どもに合わせる」ことにはかならないからだ。確かに個人の尊厳や人権の尊重などは、強制しなくても子どもたちに教え込まなければならない。しかし、計画的な勤労性を強いても、人生のリスク低減には結び付かない時代にあつては、全ての子どもに共通している「知りたいという欲求」を子どもの認知の特性や関心に応じて刺激し、その子の学びの扉が開くように働き掛けることが大事。情報端末はそのための最も重要なツールだし、政府も発達障害やICT、サイエンスなどの専門家が教員免許をより容易に取得できたり、子どもたちの学びを時間的にも空間的にも多様化したりするための方策について、府省横断で検討している。

わが国の教師が本来模索してきたのは、「そろえる」教育ではなく「伸ばす」学び。時代の転換期の今はその実現の最大のチャンスである。